歴史に学び、未来に備える――総合知で読み解くパンデミックと社会のレジリエンス

東北大学（三木 康宏、川内 淳史、中鉢 奈津子、児玉 栄一、伊藤 潔）

新型コロナのパンデミック宣言を契機に、東北大学有志で「スペイン風邪文理連携勉強会」をスタートした。基礎医学、臨床医学、歴史学、地理学で協働し、1918～1920年のH1N1型インフルエンザ（スペイン風邪）を総合知の観点で検討している。100年前のパンデミックの実相を明らかにし現代と未来への示唆を導くことを目的に、URAがモデレーターを務め、学際的対話を促進。成果として論文や発表・講演等を通じた社会発信が進んでおり、自然科学と人文社会科学を融合した感染症危機への統合的アプローチとレジリエンス構築を目指している。

総合知により目指すビジョン / 解決する社会課題

100年前のパンデミックの実相を明らかにし、その分析を通じて現代・未来への提言を導くことを目指す。総合知を反映した論文・発表・講演を通じて社会へ発信し、総合知構築ノウハウ等を体系化し、将来の課題にも展開可能な知の枠組みにまとめる。

ビジョン達成の課題

各分野の専門性を尊重しつつ、文理間のアプローチの差異を超えて協働と対話を重ね、緩やかに共通課題を設定して持ち帰り深化させ、統合・再構築することが課題である。共通言語の構築（翻訳）と、URAによる社会実装への橋渡しが求められる。

「矩」を超えた場づくり / 得られた新たな価値

基礎医学、臨床医学、歴史学、地理学が協働し、専門間の学際的な翻訳者（ブリッジ）としてURAが機能する勉強会を継続した。専門性の壁を越えて対話を重ね、文理連携による新たな学術的理解が形成された。また、URAが橋渡し役を担うことで研究基盤が整い、感染症危機への統合的アプローチの可能性が開かれた。

歴史に学び、未来に備える
――総合知で読み解くパンデミックと社会のレジリエンス

三木康宏、川内淳史、中鉢奈津子、児玉栄一、伊藤潔（東北大学）

概要

- 2020年3月のWHOによる新型コロナウイルス感染症パンデミック宣言を契機に、東北大学有志で「スペイン風邪文理連携勉強会」をスタート。
- 基礎医学、臨床医学、歴史学、地理学で協働。モデレーターはURA。
- 1918～1920年に世界で数千万人の命を奪ったH1N1亜型インフルエンザ（スペイン風邪）を総合知の観点から検討し、その知見を社会に向けて発信。

主な活動

- スペイン風邪に関する先行研究、東北大学図書館所蔵のスペイン風邪当時（大正時代）の医学雑誌の共同検討。
- 緩やかに共通課題を設定し、各課題をそれぞれが自らの専門性に持ち帰って消化・深化。的確な解決に向けて統合・再構築。
- 勉強会で得られた知見を、論文プレスリリース、メディア出演（新聞・テレビ）、自治体や病院での講演会・講習会等を通じて社会に発信。

検討トピック例：
- スペイン風邪は本当に忘れられていたか
- スペイン風邪の教訓
- COVID-19 との共通点
- 日本と英語圏のスペイン風邪研究動向
- 宮城県のスペイン風邪被害
- 1890年ロシア風邪
- 大正時代の科学レベルや学閥による病原体説

メンバーそれぞれの受け止め

文

医

三木 康宏 准教授
獣医師、基礎医学

以前から文系的内容に興味があり、文系的論文も書いてきたが、専門の話を聞くのは興味深い。歴史事象をどう研究にするか知ることができる。勉強になる。

川内 淳史 准教授
歴史学、近現代医療史

歴史家は史料を読めるが診断はできない。医療史研究を進める際、医学の専門性に助けられている。互いの専門性や重要性を尊重できている。対話が進むリラックスした雰囲気がよい。

児玉 栄一 教授
医師、ウイルス学

コロナ禍で講演を頻繁に頼まれた。勉強会で出たトピックを話すと聴衆の反応が良い。人は医学的知識より「結局これは何年続くのか」など、歴史的・社会的な話を聞きたい。

中鉢奈津子 特任准教授
URA、地理学

異分野連携事例を参与観察できる。「つなぎ役」URAの実践の場でもある。論文出版頻度・連名に対する考え方など、医学の研究文化が興味深い。歴史学と地理学が実は近いことも初めて実感した。情報発信することにも大きな意義を感じた。

伊藤 潔 名誉教授
医師、臨床医学

面白い。歴史をはじめとする文系の分野にかかわりたいと思っていた。ウイルス学の専門家の存在で正確な科学知識に基づく議論ができるのも重要。

特色

- 研究者の自主性・知的好奇心を原動力とすることに加え、互いの専門性と人格の尊重、和やかな雰囲気を確保する。
- テーマを縛りすぎず、成果を急ぎすぎず、時間をかけて信頼関係を構築して耳を傾けあい、文理間のアプローチの差異を超えて協働と対話を重ね、学際的理解を深める。
- 社会とのインタラクションも意識する。

これまでの成果

- 論文等
  - 三木康宏，中鉢奈津子，川内淳史，児玉栄一，伊藤潔：令和パンデミックの今，大正パンデミックを計量書誌学的に考察する，日本生殖内分泌学会雑誌，26，36-38（2021）
  - A. Kawauchi, N. Chubachi, Y. Miki, K. Ito, E. N. Kodama: Analyzing Trends in the Medical Community During the Spanish Flu Pandemic in Japan with the Comprehensive Knowledge of Humanities and Sciences: A Case Study of the Medical Journal, The Japan Medical World, Journal of Disaster Research 19 (6), 921-934 (2024)
  - 中鉢奈津子，三木康宏，川内淳史，児玉栄一，伊藤潔：医学・人文社会科学の連携で100 年前のパンデミック“スペイン風邪”を追求，RMAN-J Journal Vol. 3, 13-15（2025）
- 学会発表
- 勉強会で得られた知見を、論文プレスリリースに加えて、興味を持った方々からの依頼により、メディア出演（新聞・テレビ）、自治体や病院での講演会・講習会等を通じて積極的に社会に発信することで、社会とインタラクションできる機会を創出
- 総合知構築ノウハウの検討・分析も実施

100年前のパンデミックの実相を明らかにし、現代・未来への提言を導く。
パンデミックをめぐる多様な立場の視点を俯瞰。自然科学と人文社会科学の知を融合し、感染症危機への統合的アプローチと社会的レジリエンスの構築を目指す。
社会発信後のフィードバックも取り入れ、次の来たるべきパンデミックに備えて研究を継続していく。